



HR FACTORY SHORT NOVEL BEST

Re:Creation

2002 ~ 2016

HR FACTORY SHORT NOVEL BEST

Re:Creation

2002～2016

DIGITAL EDITION

(お試し版)

うらかみ こてつ 著

HR FACTORY

Re:Creation 2002～2016

目次（1～5は製品版に収録しています）

1. プレシヤスドリーム（2002年作品）・・・・・・・・・・
2. 夏の幻（2009年作品）・・・・・・・・・・
3. STAGE～響けココロの唄～（2006年作品）・・・・・・・・
4. 2011・03・11（2011年作品）・・・・・・・・
5. あの夏を忘れない（2016年作品）・・・・・・・・
6. STAY～距離を超えて・それから～（2010年作品）・・・・・・4

(電子書籍版限定 追加収録)

STAY (距離を超えて・それから)

戦場のようなオフィスの一室。

机の上には大量の書類が乱雑に置かれている。

ビジネスフォンのベルが、目覚まし時計のように鳴り響く。

「はい、山中食品です。」

即席ラーメンで有名な山中食品の営業部に勤める、入社2年目の雅夫は取引先からの電話の応対、打ち合わせや会社まわりで日々あわただしく過ごしている。たまに伝達を誤るなどで、上司にきついお灸をすえられることもあるが、少しでも自分の生活を豊かにすべく日々努力を続けている。

そんな雅夫には、1年半ほど付き合っている女性がいる。同じ会社の受付嬢の南。雅夫とは同期入社。明るく器量のある南とは、入社直後に開かれた新入社員歓迎飲み会のころから付き合い始めた。それ以来、言いあいとかはあったものの、順調に愛をはぐくんできた。

秋の新商品リリースラッシュも一段落した11月の終わり、南の誕生日の夜。雅夫は南をレストランに誘い、誕生日パーティをした。注文した食事を食べ終え、雅夫は会社で使っているバッグから紫色の小さな箱を取り出した。

「南、おれからの誕生日プレゼントだ。」

雅夫は、小さな箱を南に渡した。

「あけてみて。」

「うん。」

南は、箱を開ける。喜んでもらえるか不安で雅夫の緊張は高まっていた。

箱をあけた瞬間、南は目を輝かせその中身を見た。箱の中には、エメラルドのリングが入っていた。雅夫は、決して多くない給料の中から少しずつ貯金をして、南のために指輪を買ったのである。

「雅夫、高かったじゃない。このリング。」

「これは、南のためにお金をためて買ったんだ。そろそろ、自分の中で気持ちにけじめをつけたくて。」

雅夫は、このリングのプレゼントをきっかけにして、しばらく考えていたことを話そうとしていたのである。

その一言を南に話した数日後、雅夫に会社から辞令がでた。それは、韓国への転勤命令だった。期間は翌年の1月からで、約1年間の予定だという。雅夫はその辞令を聞いて愕然とする。顔ではいつものとおりの笑顔で仕事していても、心が仕事する気になれない、そんな状況がそれから数日続いた。

南からの夕食やデートの誘いを次第に遠慮するようになった。南は雅夫に何があつたの？と聞くが、しばらく1人にさせてくれ、と突き放すように答えるだけだった。暖かかった2人の関係が少しずつ冷めていった。

2

12月の半ば、山中食品の忘年会が居酒屋を貸切り盛大に行われた。南は同僚と食事や酒を楽しみ、雅夫はうつむき加減でひとりちびちび酒を飲んでいるところに上司が乱入し酒のつぎあいになって、愚痴を聞きながら酒やつまみを食べていた。

忘年会が終わり、雅夫は2次会に参加せず会社関係者と別れた。

帰り道、自宅近所の公園に立ち寄り、ベンチに座り澄んだ夜空に浮かぶ星をながめていた。

会社に入ってからの日々の思い出が頭の中でよみがえる。時には厳しく、時にはやさしく、ちよつとおちちよこ

ちよいな自分の面倒を見てくれた上司。そして、プライベートで雅夫を支えてくれた南。年を越す前に日本を離れないといけない。期間は約1年だが実際どれくらいかかるかわからないがしばらく南に会うことがでなくなるのは事実である。旅立ちの日は刻一刻とせまっている。

すると、ひとりの女性が公園にやってきた。南である。

彼女も2次会に参加しないで居酒屋をあとにしたのである。先に帰った雅夫のことが心配であとを追っていた。

「まさお。」

やさしく声をかける南。

「あつ。おつかれさま。2次会行かなかったんだ。」

雅夫は気の抜けた声で返事する。南はかばんからあたかい缶いりお茶を2つとりだし、1つを雅夫にわたす。

「ありがとう。」

雅夫は、缶をあけて一口飲む。南は落ち着いた口調で話し出す。

「営業部の先輩から聞いたよ、韓国支社への転勤。私もびっくりした。でもいちばんつらいのは雅夫のほうかもしれないね。」

雅夫は南の言葉を黙って聞いていた。

「私の誕生日の日に、プロポーズしてくれてうれしかった。雅夫とはこれからもいい関係でいたいな、と思う。でも、何で転勤の話、言ってくれなかったの。どうして1人で悩むの。私がいると迷惑なの。あのプロポーズは嘘だったの？」

南は語気を強めて雅夫に迫った。

「ごめん、黙っていて。ただ・・・」

雅夫は細々と話した。

「ただって・・・何？」

南はさらに雅夫に詰め寄った。

「今回の出張が始まったら1年以上も南に会えなくなってしまう。南と離れるのがこわくて、つらくて・・・」
雅夫は南に本音を語った。すると南は軽く笑って答えた。

「そんなこと言うなんて雅夫らしくないよ。たしかに今までみたいに出会いたいことも話すこともできなくなるかもしれないけど、ふたりの絆は簡単に壊れないよ、きっと。あたし、この前の誕生日の日に決めたんだから。ずっと雅夫についていくって！」

南はとびっきりの笑顔で雅夫に思いをぶつけた。

「南。」

南の決意に雅夫は心を打たれた。少し間を置いて、南の目をじっと見つめて話した。

「ありがとう、南。働く場所は変わってしまうけど、今までどおりがんばるよ。できるときにはちゃんと連絡もする。ひとまわりもふたまわりも大人になってくる。籍も式も今回の転勤が終わったらやろう。」

雅夫の言葉を聞いて、南の目からは涙があふれだした。そして雅夫をぎゅっと抱きしめた。

「気をつけて行ってきたね。浮気なんかしたら絶対許さないから！もし浮気とかするようだったら、あたし、追っかけちゃおうかな。」

「・・・」

星空が輝く夜空に、雅夫と南のふたりの愛はさらに深まった。

雅夫の韓国行きの日にはクリスマスイブの2日前である。その1週間前くらいから、会社での残務処理や引越しの準備に追われた。

旅立ち前最後の日、雅夫と南は、ふたりで最後のデートを楽しんだ。新宿のレストランで食事し、駅前のきれいなイルミネーションを眺めながら、時間を忘れるくらいいろいろなことを話した。次にこういうデートが出来るのはいつの日になるかわからない。ふたりの愛をさらに深めた1日になった。

そして、旅立ちの日。快晴の昼さがり、雅夫と有休をとった南はふたりで空港に向かった。

空港へ向かう電車の中ではいつもの元気な調子で語り合っていたが、空港が近づくに従い口数が少なくなった。心の中ではお互いしばらく顔を寄せ合い会えなくなることがつらかった。

空港に着いて搭乗手続きを済ませた雅夫の真剣な顔を見て、南の目から大粒の涙があふれだした。

「気をつけて行ってきたね。私、つらくなってきたら、電話いれるから。というか、韓国に行っちゃおうかな、会社やめて。」

「おいおい、会社をやめるのはだめだぞ。でも、連休とれたら遊びに来いよ。待っているからな。・・・たのむから、悲しい別れじゃないんだから泣くなよ。白い糸は、遠くても繋がっているんだから。」

「それを言うなら、赤い糸でしょ！」

南は、いつもの元気な笑顔に戻った。その笑顔を見て、雅夫も安心する。

そして、出発のとき。

「行ってきます！」

雅夫は搭乗口に向かつて歩き出した。

「気をつけて行ってくるんだよ！浮気なんかするんじゃないぞ！つらくなったら電話してよ！飲み水に気をつけろよ！あたしのこと・・・ずっと・・・想っていてねっ！」

雅夫の姿が消えるまで、南は手をふりながら雅夫に呼びかけた。

「おいおい、はずかしいよ南。」

思いのたけをふりしぼって言った南の思いは雅夫にきちんと届いた。

雅夫を乗せた飛行機は、韓国に向け飛び立っていった。場所の距離は遠くなったけど、雅夫と南の心の距離は今までと同じ、いやさらに近づいた。

4

雅夫は韓国のソウルで、日本のところと同様営業担当として連日精をだしていた。言葉に苦しむことがあったが、徐々に新しい生活にも慣れていった。

季節は春になり、日本がゴールデンウィークに差し掛かる前、雅夫に一時帰国の許可がでた。5月1日から5日間、日本に一時帰ってもいい、というものだった。

この許可が出た日の夜のこと、雅夫は南に国際電話をかけた。しかし、南は電話に出なかった。どうしたのかな、と思ったが、南には内緒で帰国することにした。

約4ヶ月ぶりの日本。雅夫の住んでいた町並みはそんなに変わってないが、町の流行は少し変わっていたように感じた。ファッション・音楽・食べ物・・・微妙な変化を目や耳で感じていた。

雅夫は、山中食品の本社前に来た。そして、携帯を取り出し、南を呼び出す。しかし・・・

「ただいま、電話に出ることができません。ぴーっという発信音のあとに・・・」
心配になって、留守番電話にメッセージを入れた。

一時帰国の許可が下りて、日本に帰ってきた。今・・・にいるから、来て欲しい。来るまで待つてる。
・・・の場所。それは、昨年忘年会が終わったあと、2人が夜、愛を誓い合ったあの思い出の公園である。

雅夫は公園のベンチで、ひとりペットボトルに入ったお茶を飲みながら南の来るのを待っていた。短いようで、長く感じる時間。西日が沈みだしたころ、白い服を着た髪の短い女が公園にやってきた。

ベンチの前に立つ女。

「あの・・・何ですか？」

雅夫は、女に聞いた。すると女は、にこつと微笑んでこう答える。

「おかえりなさい、雅夫。」

女の言葉を聞いた瞬間、雅夫はえっと思った。

「南？」

すると、南はうんとうなずく。実は、雅夫が一時帰国をするという話は、雅夫に知らされる前に日本にいる南の耳に入ったのである。南は、自慢のロングヘアを切ってショートヘアにイメージチェンジして雅夫をびっくりさせ

たのである。

「ただいま、南。それにしても、びっくりしたよ。でも、ショート南、さわやかで好きだな。おれ、惚れ直しちゃったよ。」

雅夫の褒め言葉に、南の目からは大粒の涙がこぼれ落ちる。

「雅夫、会いたかったよ！」

南は、雅夫をぎゅっと抱きしめた。約4ヶ月、大好きな人に会えなかった淋しさを忘れるかのように。

「恥ずかしいよ、南。」

雅夫は照れていたが、つかの間の幸せをかみしめていた。

「そうそう、私の家へ寄ってよ。雅夫のために、腕によりをかけて料理作っただから。食べに来て！」

南は、結婚の日が少しでも近づくように、苦手だった家事を積極的にするようになった。ちなみに、雅夫が南の手料理を食べるのは始めてである。

雅夫は、南の家に寄る。

きれいに整然とされている部屋を見て雅夫の表情は穏やかになった。雅夫は料理が来るのを黙って待つ。南は、エビフライ・野菜の盛り合わせ・ポタージュスープとライスを次々にテーブルにのせる。おいしそうな食事とおおつと感動する雅夫。

「さ、食べて！」

雅夫は、南の作ったエビフライを口にする。その味に、雅夫は、また感動する。

「どう？」

南は、雅夫にそっと聞くが、雅夫はひとりもくもくと食べる。しばらくして、雅夫は箸をおいて、さっきの南の

問いに答える。

「おいしいよ。ありがとう。よくがんばったね。」

南は、雅夫の言葉に満面の笑みを浮かべた。

「だって結婚相手、決まってるんだから、それにふさわしい女になったかったんだもん。日本と韓国、その距離ができたせいなのかな。」

雅夫は、南の言葉に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。南は自分のためにいろいろ苦労してがんばっているのに、自分はどうなんだ、と。食事を続けながら、雅夫は南に今の仕事のことを赤裸々に話した。すると、南は雅夫にエールを送った。

「身体に気をつけて、自分のペースでがんばりなよ。あせることなんてないから。一時帰国の間に、もういちどエネルギー充電して！」

南は雅夫のもとにやってきて、そっとキスをした。

次の日から、雅夫と南は横浜中華街や港ヘデートにしに行ったり、有楽町で洋服を買ったりして、つかの間の休息を二人で楽しんだ。

ゴールデンウィークの一時帰国の期間が終わり、雅夫は再び韓国に戻った。

南は高校の同窓会出席のため空港で見送ることはできなかったが、出発の日の朝に電話でメッセージを送った。雅夫はありがとうのひとことを残して旅立った。

それから半年の月日がたち。

雅夫は韓国出張を無事に終え、日本に帰ってきた。

南は空港で雅夫を迎え、再会を喜び合った。

そして、東京でふたりは順調に愛をめぐくみ、雅夫が韓国出張を終えた1年後にめでたく2人は結婚した。

5

雅夫と南が結婚して3年がたった。

結婚してからの住まいは、中野駅からバスで15分ほどのところにある8階建てのアウトレットマンションの303号室。そして、雅夫と南の間には1年半前に長男良太が生まれ、今は3人で暮らしている。

南は出産を機に山中食品を退社した。雅夫は山中食品の営業部副部長に昇格して、100円ショップやコンビニ向け即席めんの営業活動に励んでいた。

景気低迷が長引いているせいか、雅夫の給料は昇給するどころか減給している。2人で働いていたときなら、2人でお金をかせぐことができたが、南が子育てに専念するようになった今の家庭の生活は雅夫のがんばりなしでは成り立たない。

収入が少なくなることを承知している南は雅夫が仕事で無理しないように自分の大切にしていた趣味の品をフリーマーケットやリサイクルショップなどに出したり、節約術を学んだりして、家計を助けるように努めた。

ところが、次第にふたりの間で場所の距離とは違う、目には見えない距離ができていた。

雅夫は相変わらず朝早く会社に出かけ、夜遅くに帰ってくるが多い。

夫婦での会話はおろか、良太と遊んでやることもほとんどできていない。

すべては、生活のため。

南は雅夫の苦勞に対して必死に我慢を続けていたが・・・

冬まったただ中のある日のこと、ちよつとしたことでは病氣をしない南が珍しく体調を崩して寝込んでしまったのである。

夜、雅夫が家に帰ると居間の明かりが消えていて、茶の間にいつもあるはずの夕食がない。あわてて寝室に向かうと、頭に水枕、額には熱さましのシートをつけて顔面蒼白で眠っている南の姿があった。

「南・・・」

戸の開いた音で南の目が開いた。

「あ、ああ・・・まーちゃん、ごめん。頭が痛くて・・・」

変わり果てた南の姿に雅夫は焦る。

「なあ、良太はメシ食ったのか？」

雅夫の問いかけに南は小声で答える。

「それはなんとか・・・」

その良太は、南のとなりですやすやと眠っていた。

「南、お前はなんか夕飯食ったか？」

「食欲がなくて、食べてない・・・」

力のない南の声に、おなかのすいた雅夫は夕飯用意してくれよとは、とてもじゃないけど言えなかった。そして、台所の照明をつけ鍋に3分の1くらいの水を入れて火にかけ、沸騰したあと炊飯ジャーに入っていたごはんを約2人分入れて粥（かゆ）を作り横になっている南の分と夕飯を食べていない雅夫の分をつぎ、南のもとへ向かった。

「南、俺も夕飯食ってないんだ。お粥用意したから、一緒に食べよう。」

寝室の明かりをつけて、ふたりで雅夫の作ったお粥を食べる。

南はひとくちしみじみ食べると真顔でじつと雅夫の顔を見つめた。

「どうしたんだ、遠慮するなよ。」

雅夫は相当腹がすいていたのか、いつもよりも早いスピードで口にほおばっていた。

「まーちゃん、ほんとにごめんね。仕事で疲れているのに。」

南の目からうつすら涙がこぼれ落ちた。

「おいおい、急に泣くなよ。」

雅夫は箸を動かす手を止め、南の顔をじつと見つめた。結婚する前は、2人で顔と顔を見つめあうことは多かったが、結婚して家庭を持つようになってからはあまりなかった。雅夫自身仕事が多忙ではあるものの、南や良太のことはかたときも忘れず心配していたつもりだったが南の涙を見て、気づかないうちに2人の間に心の距離ができてしまっていたのかもしれないと思うようになった。家事や子育てで日々ストレスがたまっていた南の気持ちをなんでわかってやれてないのだろうか、と。

雅夫はただ黙って南の目を見つめていた。

翌日の朝、雅夫は会社に遅刻すると連絡し、南や良太と一緒に過ごした。

南の体調は一晚休んでだいぶ良くなったが、大事をとって半日寝てもらって、良太の面倒をみた。手馴れていないせいか、泣き出すこともあったけど、自分の息子のかわいさにデレデレだった。南の表情にも笑顔が戻った。

お昼になり、雅夫はスーツに着替え会社へ向かった。

そして、日も暮れて夜になり、雅夫が会社のかばんと買い物袋を持って自宅に戻ってきた。

「ただいま。」

玄関には南がにつこり笑顔で迎えてくれた。

買い物袋の中には、食材がたくさん。そう、会社に行く前に南に頼まれて帰りにスーパーで買い物をしてきたからである。

「ありがとう、忙しいのに無理させちゃって。」

「そんなこといいよ、おれ、そしたら良太面倒見るよ。」

「お願いね。」

雅夫は買い物袋をテーブルの上に置き、自分の部屋でスーツを脱いで部屋着に着替えて茶の間で良太の面倒を見る。

雅夫と南は、この出来事を機に心の距離を縮める努力をはじめた。

幸せのカタチって、お金があるだけなのだろうか。

付き合っていたころとは違う愛のカタチって何だろうか。

楽しいこともあるだろうけど、辛いことのほうが多いのかもしれないことである。

心の距離は、縮まることも広がることもある、見えない糸のようなものかもしれない。

DIGITAL EDITION 完全版のご案内

2002 年初めてオリジナル作品として発表した大学生バンド
を題材にした「PRECIOUS DREAM」。

高校の同窓会を題材にした切ない物語「夏の幻」。

女性歌手の夢と友情を描いた「STAGE」。

東日本大震災当日の著者の出来事を残した「2011.03.11」。

中学校の陸上部を舞台にした短い恋物語「あの夏を忘れない」

HR FACTORY 短編小説の活動記録としての一冊。

完全版もお楽しみに頂きますよう宜しくお願いします。

+++++

HR FACTORY SHORT NOVEL BEST

Re:Creation

2002～2016

DIGITAL EDITION お試し版

2016年12月30日 初版発行

2017年3月31日 電子書籍版発行

著者 うらかみ こてつ

製作 HR FACTORY

<http://ameblo.jp/hrfactory/>

t w i t t e r : @urakamiketetsu

お問い合わせ teamkirakira@hotmail.com

※この物語はフィクションです。